７　合戦原遺跡出土の馬具と馬装

宮代 栄一(朝日新聞社 編集委員)

（１）合戦原遺跡出土の馬具

合戦原遺跡ではST18、ST36、ST46、ST49、ST51、ST53・ST54から馬具が出土している。本節では、それらが用いられた当初の組み合わせや馬装などについて、小文ではあるが、考察させていただく。

それぞれの馬具についての詳しい説明や図版は、第3章(第1・2分冊)の事実記載をご覧いただきたいが、合戦原出土の馬具類は大きく3時期に分けることができる。すなわち、暦年代でいうと、6世紀末～7世紀前半、7世紀中葉～後半、8世紀以降である。

6世紀末～7世紀前半に属すると考えられるのが、ST36出土の馬具群である(第520図・上)。これらは鉄地金銅張の花形鏡板付轡、同巧の杏葉、同じく鉄地金銅張の八脚系の雲珠・辻金具などから構成されており、陶邑古窯址群の須恵器編年(以下、陶邑編年)に換算すると、TK209型式期並行のものと考えられる。

それに続く7世紀中葉の副葬と考えられるのがST49から出土した馬具群である(第519図・下)。鉄製の鉸具造立聞環状鏡板付轡を中心に構成される組み合わせ(アセンブリッジ)で、馬の飾りベルト(繋)を留めるためのバックルである鉸具を4点と、2組の鐙を伴う。鐙は一見、いずれも輪鐙であるかのように見えるが、第519図に示したもののうち、上の二つ(5・6)は木芯の鉄製壺鐙であり、下の二つ(7・8)は金属製輪鐙である。

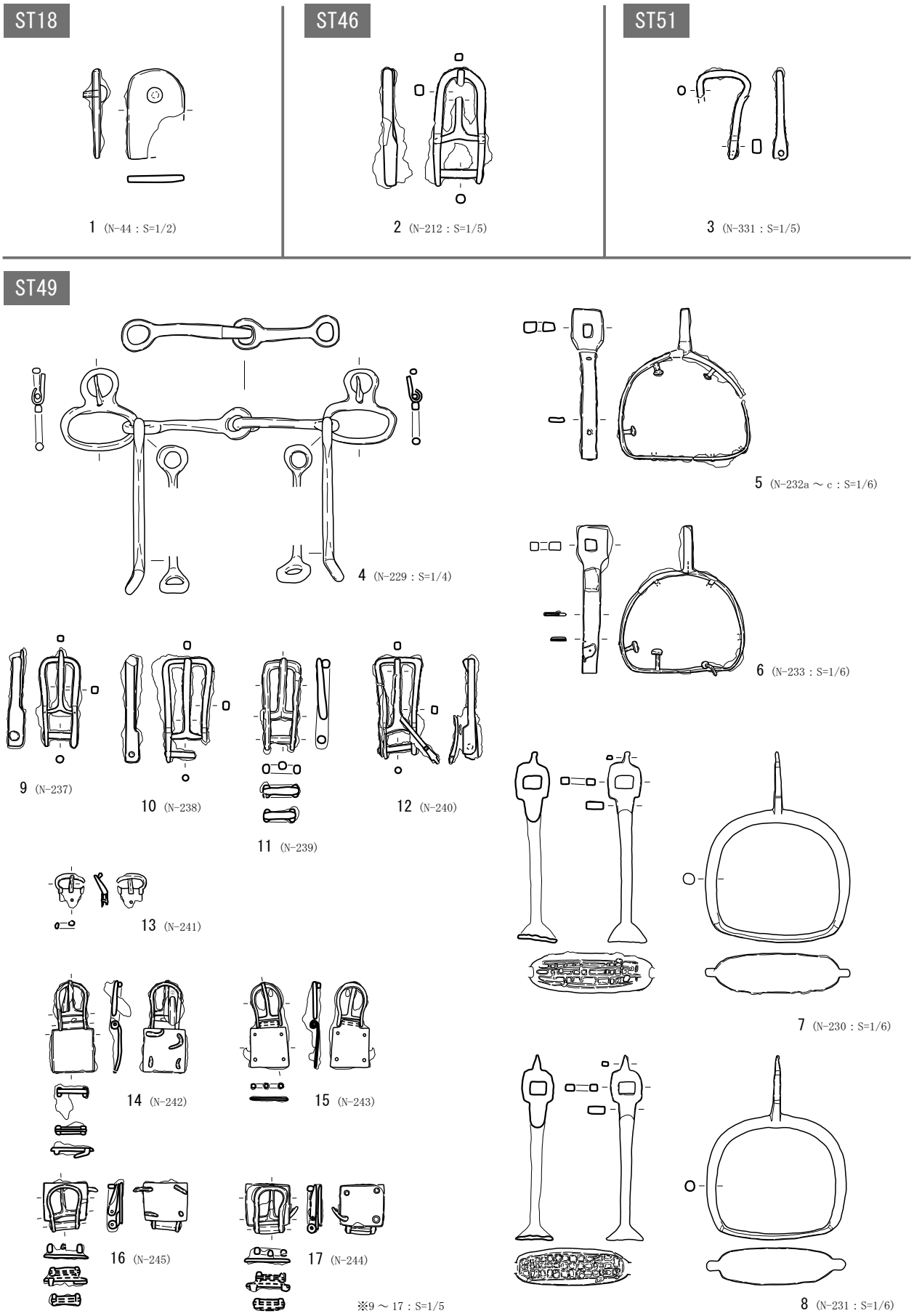
ST49で特筆すべきは障泥金具の存在である。第519図14～17にみえる、鉸具の下に鉄板をとりつけた金具が相当する。障泥金具については以前に考察を実施し(宮代2004)、近年では片山氏の研究があるが(片山2018)、本例を障泥金具と考える根拠としては、鉄板を貫通した鋲脚が裏側で打ち曲げられ、それと鉄板の間に数ミリの空間が認められること(有機質を挟み込んで留めたと考えられる)、個体数が4点で左右に2点ずつを用いる障泥金具と考えると整合性が高いこと、障泥金具に特徴的な「留具が鉸具状である」という要件を満たすこと等が指摘できる。障泥の全体の形状(推定)は筆者の馬装の復元図(第521図・上)を見ていただきたいが、鉸具の部分で馬から吊すベルトを取り外しできるようになっていた可能性が高い。

アセンブリッジの時期については、中心となる鉸具造立聞の環状鏡板付轡が決め手となる。この種の轡については岡安光彦氏(岡安1984、1986)や大谷宏治氏らの研究(大谷2014、2015、2016)があり、法量が大きなものから小さなものへと変遷していくことが明らかになっている。詳しくはそれらに譲るが、本例は陶邑編年ではTK217型式期並行、あるいは飛鳥編年の飛鳥Ⅲに相当する時期のものと考えられる。

一方、壺鐙については、斎藤弘氏や大谷宏治氏等の研究(斎藤1985、大谷2018)があり、また、時代の新しいものについては津野仁氏の研究(津野2011) がある。それらを踏まえて考えるなら、木芯鉄製壺鐙(第519図5・6)には飛鳥Ⅲ、金属製輪鐙(第519図7・8)には7世紀後半という年代を想定するのが妥当ではないか。

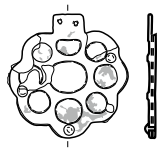
これらに続く7世紀中葉～8世紀の副葬と考えられるのが、ST53・ST54から出土した馬具群である(第520図・下)。素環状鏡板付轡1点(第520図12)、バックルの一種である鉸具6点(第520図13～18)、金属製壺鐙1組(第520図19・20)から構成されており、小さめの鉸具(第520図13・14)は鐙を吊す用途で用いられた可能性が高い。金属製壺鐙(第520図19・20)については、上述の斎藤・大谷両氏の研究があるが、結論から言えば、陶邑編年のTK217型式期並行、ないし飛鳥Ⅲ型式期並行と考えてよいだろう。

一方、金属製の引手部を伴わないこと等から、素環状鏡板付轡(第520図12)は古墳時代のものとは考えにくい。津野仁氏の研究(津野2011) によれば、金属製引手を伴わない轡は、岩手県鰹沢遺跡17号住居や千葉県



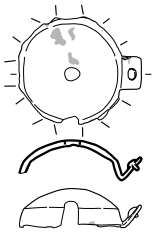
第519図　合戦原遺跡出土の馬具１

ST36



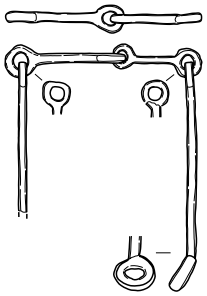
1 (N-157：S=1/5)

2 (N-156：S=1/5)



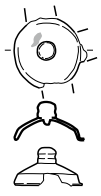
5 (N-152)

6 (N-153)

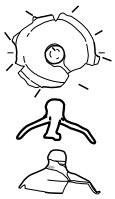


3 (N-154：S=1/6)

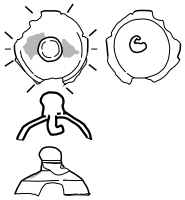
4 (N-158：S=1/6)



7 (N-149)

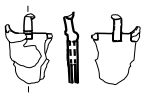


8 (N-150)



9 (N-151)

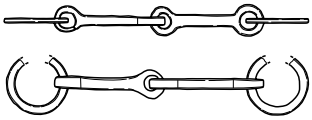
10 (N-155)



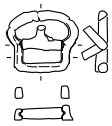
11 (N-120)

※5 ～ 11：S=1/5

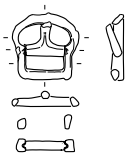
ST53・54



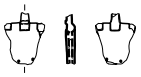
12 (N-342：S=1/6)



13 (N-343)

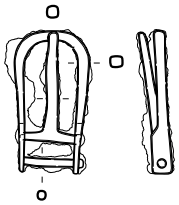


14 (N-396)

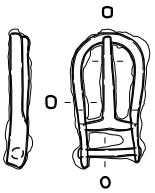


15 (N-397)

16 (N-398)

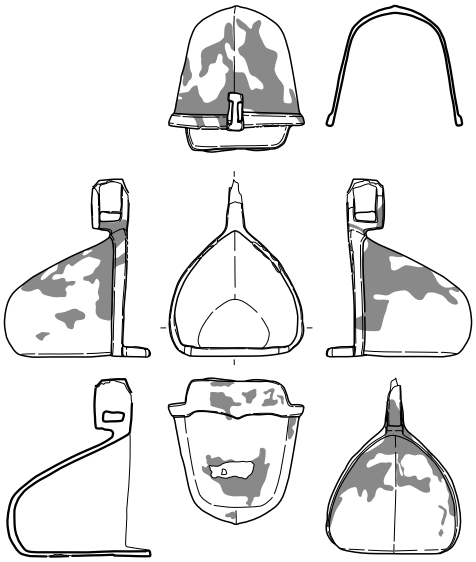


17 (N-352)

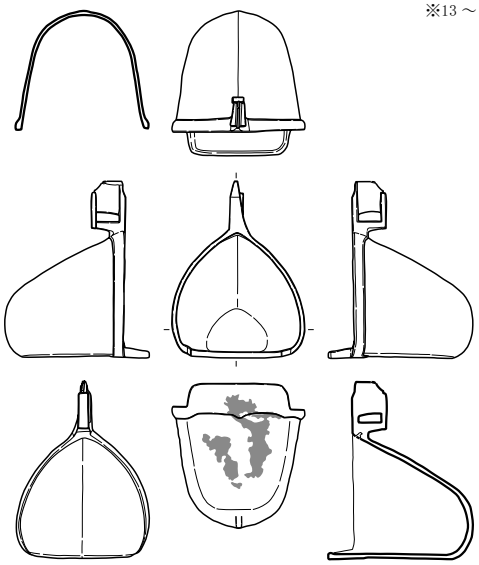


18 (N-353)

※13 ～ 18：S=1/5



19 (N-399：S=1/8)



20 (N-403：S=1/8)

第520図　合戦原遺跡出土の馬具２

上谷遺跡 A177 住居に類例があり、前者には 9 世紀、後者には 8 世紀末～9 世紀の年代が想定されている。また、この轡は鏡板を板状に鍛造しているが、こうした特徴は秋田県湯の沢 F 遺跡 32 号墓出土例(9 世紀後半)などに認めることができる。これらのことを考え合わせるなら、この轡の年代は 9 世紀代を想定するのが妥当であろう。おそらくは横穴墓造営時のものではなく、その後の追葬によってもたらされたもので、壺鐙などとは本来は別のアセンブリッジを構成していたものと考えられる。これら以外の馬具としては ST18 出土の半円形飾金具、ST46 と ST51 から出土している鉸具などがある(第 519 図 1～3)。ST18 の飾金具については筆者の年代観によれば陶邑編年の TK209 型式期(後半)以降のものである可能性が高い。ST46 と ST51 の鉸具についても同様で、これらはいずれも古墳時代の副葬品であったと推測される。

（２）合戦原遺跡出土の馬装の復元

これまでの検討成果をもとに、合戦原遺跡出土の馬装を復元してみた(第 521・522 図)。

実際の出土馬具に基づく馬装の復元図の製作は、2002 年に桃崎裕輔氏が福島県笊内 37 号墓の馬装について実施したのが嚆矢であり、筆者が 2004 年に福岡市立博物館の『秘められた黄金の世紀展　百済武寧王と倭の王たち』の図録で示したものがそれに次ぐが、現在では一般的に行われるようになってきた。

第 521 図は合戦原 ST49 出土の馬具のアセンブリッジから、馬装を想定したものである。上は、鉸具造立聞環状鏡板付轡を中心とした組み合わせで、鞍から木芯鉄板張壺鐙と鉄製の障泥金具をつり下げる(鞍は木製だったと思われ、残存していないが図上で復元した)。TK217 型式期、ないし飛鳥Ⅲ型式期のものであろう。

下は、やや時期が下るが、金属製輪鐙をつり下げた馬装で、TK46 型式期ないしは 7 世紀後半のものと考えられる。この輪鐙と同時期の轡は ST49 からは出土していないため、時代の異なる輪鐙だけがのちに追葬されたか、鉄製の鉸具造立聞環状鏡板付轡を長期にわたって用いており、鐙は木芯鉄板張壺鐙と金属製輪鐙を取り換えて使っていた可能性などが考えられる。復元図では後者のケースを図化してみた。

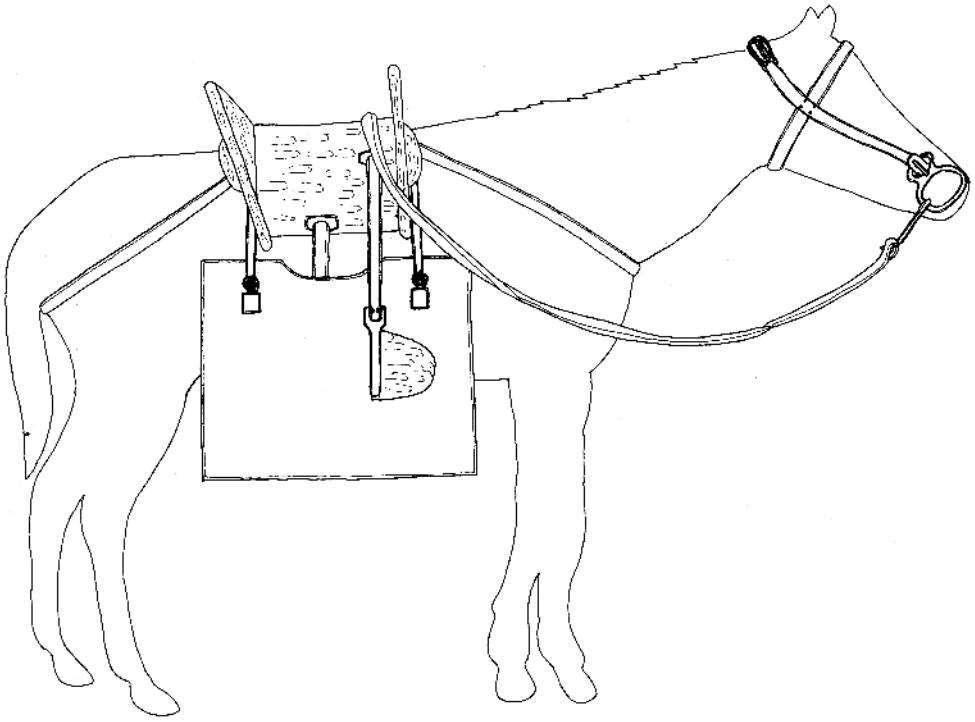
第 522 図は ST36 及び、ST53・ST54 から出土した馬具の組み合わせの馬装復元図である。

第 522 図上は、ST36 出土馬具の馬装の推定図で、馬の面繋には鉄地金銅張の花形鏡板付轡を中心に、4 脚の鉄地金銅張辻金具を 3 点とりつけ、尻繋には辻金具と同巧の八脚雲珠から花形杏葉 3 点をつり下げていたと考えられる。鐙と鞍は残存していないため、木製だったと推定して図上復元した。ただし、鞍にとりつけて尻繋を装着する鞍(しおで)と考えられる金具(第 520 図 10)が出土しているので、鞍の部分だけが金属の鞍であったと考えられる。時期は TK209 型式期のものである。

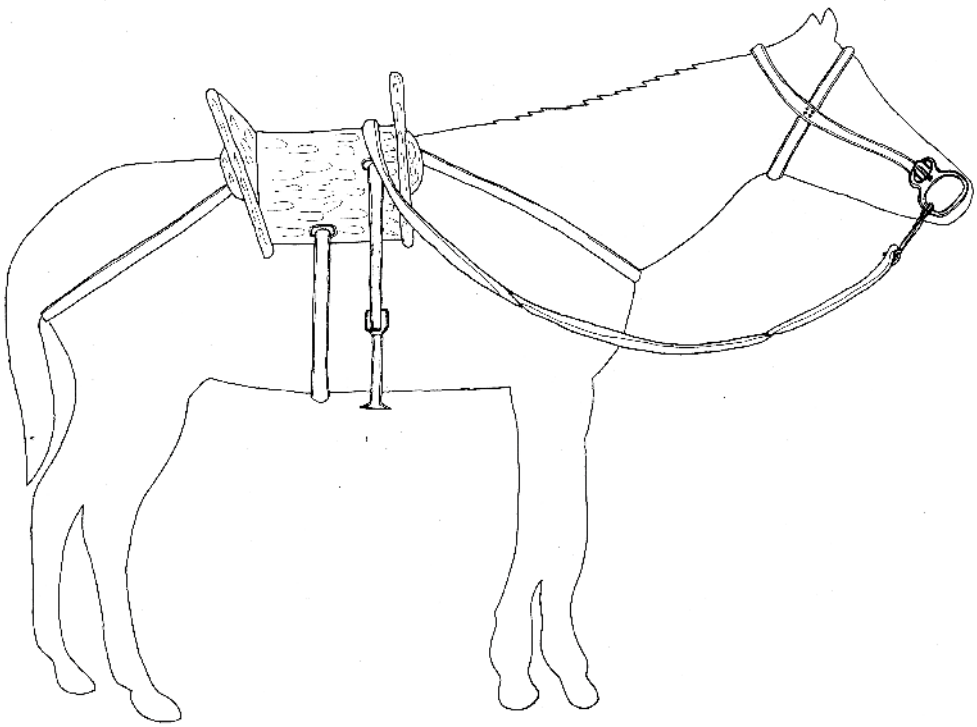
第 522 図下は、ST53・ST54 から出土した馬装の想定復元図である。この二つの遺構から出土した馬具は 7 世紀後半のものである金属製壺鐙及び鉸具と、9 世紀のものである素環状鏡板付轡に分けることができ、時期差が大きいことから、筆者はこれらは元来は同じ組み合わせを構成していなかった、と考えた。そこで、本節ではこのうちの 7 世紀後半の古墳時代の馬装についてのみ、復元を実施した。面繋と腹帯には鉸具をとりつけ、それぞれのベルトが着脱しやすいようになっており、鞍は木製であったと考えられる。轡は似た形状の壺鐙が出土している静岡県東平 1 号墳例を参考に、出土はしていないが、(失われてしまったという想定で)方形鏡板付轡を装着させている。

ただし、古墳時代の馬具については、馬装全体の組み合わせのうちの一部を取り出して副葬したり、一つのセットの馬具を異なる被葬者が分けて副葬するケースも認められ、本例がそのような例に該当する可能性もある。同様に ST18 から出土した飾金具についても、盗掘などにより存在したはずの他の馬具が失われてしまったケースのほか、当初から飾金具のみが副葬された場合もあわせて想定すべきであろう(宮代 2016)。

ST49 出土馬装復元図①

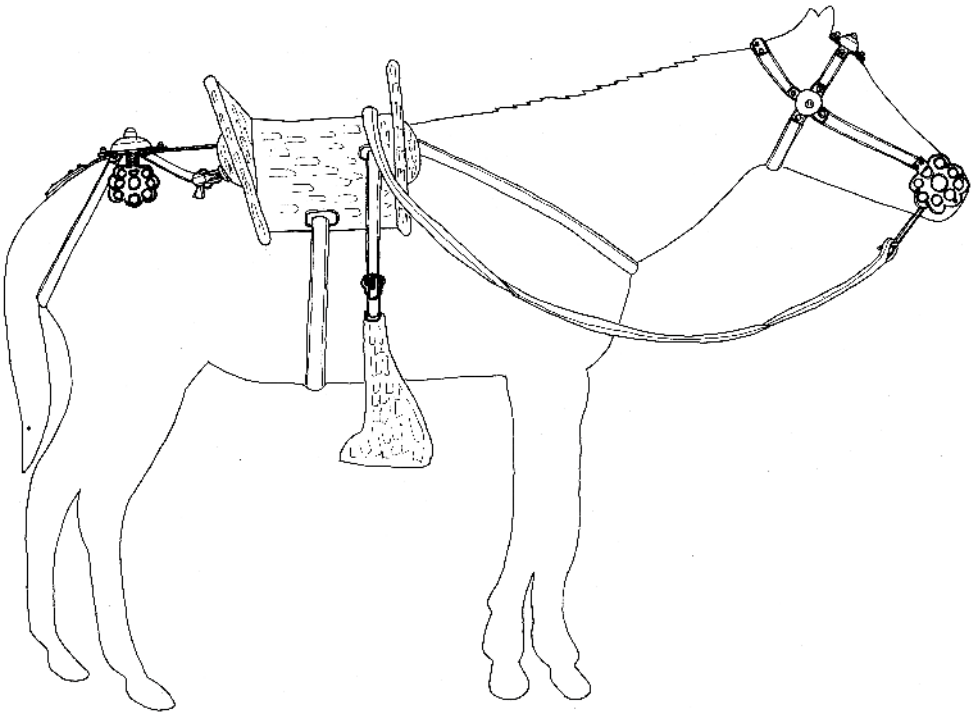


ST49 出土馬装復元図②

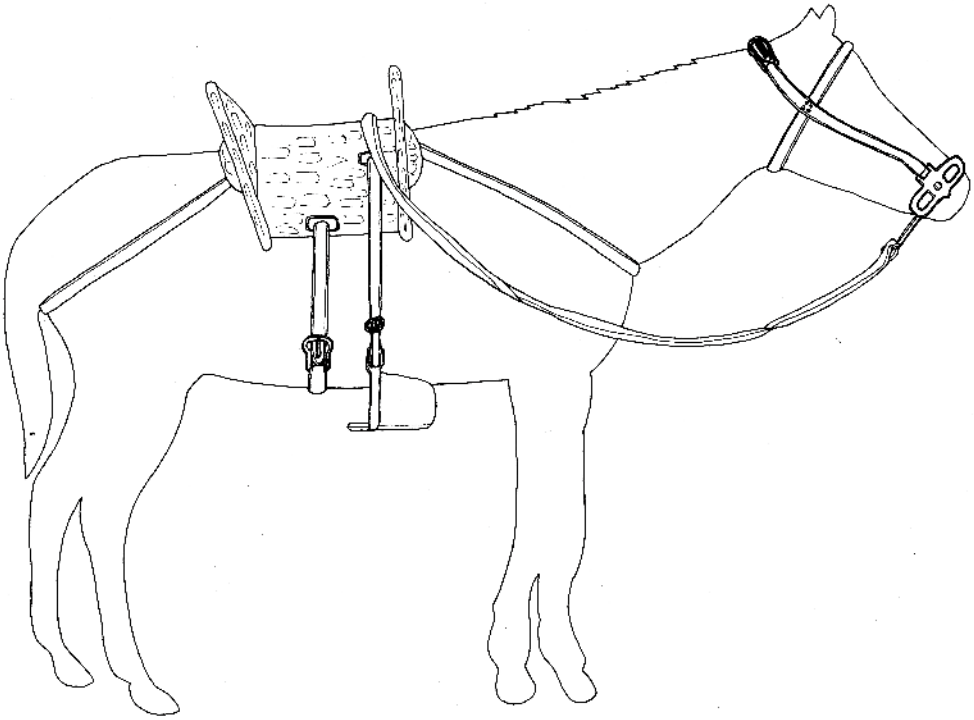


第521図　合戦原遺跡出土馬装復元図１

ST36 出土馬装復元図



ST53・54 出土馬装復元図　※轡は想定



第522図　合戦原遺跡出土馬装復元図２

（３）宮城県出土馬具の馬装の復元とその位置づけ

では、合戦原遺跡出土の馬具は、宮城県出土の馬具の中ではどのような位置づけになるのだろうか。

堀哲郎氏の研究によれば、宮城県域では 19 の遺構から馬具が出土している(堀 2017)。このうち、筆者が馬具ではないと考えたものを除き、地名表に載っていなかった亀井囲 16 号横穴墓、同 17 号横穴墓(いずれも大崎市)や吉ノ内 1 号墳(角田市)、今回確認された合戦原遺跡(山元町)などを加えた合計の遺構数は約 30 遺構となる。この数字は青森県などに比べれば多いものの、東北地方南部の福島県や関東地方などの出土数と比較すれば決して多いとは言えない数だ。

以下、筆者が今回、実測・実見したものを中心に、宮城県出土の馬具と馬装について、その概略を記していきたい。

宮城県の馬具の中で最も古いと考えられる馬具のアセンブリッジは吉ノ内 1 号墳(角田市)出土の鉄製円形鏡板付轡と青銅製馬鐸の組み合わせ(第 523 図・上)で、陶邑編年で、TK216～TK208 型式期のものと考えられる(角田市 1992)。実見した限りでは、捻りのある銜と捻りのある引手を鏡板の外側で連結し、引手は二条線に造る点に特徴がみられる。馬鐸は表面に列点を表現した小型のもので、古式の様相を呈する。県内出土馬具の中で本例だけが飛び抜けて年代が古いこと、類例が朝鮮半島に多いことなどからみて、列島外からの流入品と考えるべきだろう。

第 523 図下は、川袋 1 号墳(利府町、高橋 1978)から出土した馬装の復元図である。鉸具造立聞を持つ鉄製の環状鏡板付轡に、鉄製鉸具と鉄地金銅張と考えられる方形飾金具を伴うアセンブリッジで、方形飾金具は面繋の交差部に装着されていた可能性が高い。鐙や鞍は木製と考えられるため、図上で復元した。TK217 型式期のものである。

第 524 図上は、雁田 B4 号横穴(亘理町、志間 1975)から出土した馬装の復元図である。出土している馬具は鉄製の鉸具造立聞環状鏡板付轡のみで、ほかの馬具はすべて木製であった可能性が高い。TK217 型式期のものである。

第 524 図下は、引込 6 号横穴(宮城県岩沼市、渡辺 2000)から出土した馬装の復元図である。出土している馬具は鉄製の鉸具造立聞環状鏡板付轡と鉸具で、このほか鉄製の鋲が 2 点ほど出土しているが、裏面の痕跡などからみて、実は南西諸島産などのイモガイの螺塔部を輪切りにしたものの中心部に鋲を打ち込む、筆者のいう「イモガイ装飾金具」であった可能性が高い。筆者の知る限りでは、この種の馬具はこれまで福島県より北の地域では発見されたことがなく、出土例としては本例が北限となると考えられる。TK209 型式期のものである。

第 525 図上は、大年寺山 10 号横穴(仙台市、進藤・佐藤ほか 1990)出土の馬装の復元図である。この馬具については、経年劣化により脆弱であるとの理由で実見の機会をいただけずにいるが、調査報告書の記載と、東北歴史博物館に常設展示中の実物を観察した限りでは、轡は大型立聞を持つ鉄製の環状鏡板付轡で、鉄製の鉸具と、鉄地金銅張の方形飾金具と半円形飾金具、木芯鉄板張三角錐形壺鐙を伴う。TK209 型式期のものである。

第 525 図下は、安久東遺跡 5 号墳(仙台市、仙台市 1976)出土の馬装の復元図である。この馬具についても上記の大年寺山 10 号横穴と同様の理由で詳細に観察する機会を得られていないが、同じく調査報告書の記載と展示中の実物を見た限りでは、轡は鉄製の大形矩形立聞環状鏡板付轡で、鉄地金銅張の方形飾金具が 3 点、同巧の半円形飾金具が 4 点、繋をとりつけるための鉄地金銅張の鞍の座金具が 4 点、それぞれ出土している。

特筆すべきは鞍の座金具が通常よく出土する後輪の部分だけではなく、前輪の分も出土していることで、このことは安久東 5 号古墳出土の鞍が前輪と後輪の両方に金属製の座金具を持つ、比較的珍しい型式の鞍であったことを示唆している。TK209 型式期のものである。

では、これらの事例から、一体何が見えてくるのだろうか。まず、宮城県内の馬具・馬装の大きな特徴として、鉄製の環状鏡板付轡を中心とする組み合わせが多いことが指摘できる。鉄製の環状鏡板付轡以外の馬具が出土したのは、吉ノ内 1 号墳(角田市、鉄製円形鏡板付轡)、亀井囲 16 号横穴(大崎市、三連銜を伴う鉄製棒状鏡板付轡)、合戦原 ST36(山元町、鉄地金銅装花形鏡板付轡)の 3 例に過ぎない(9 世紀の製品と考えられる合戦原 ST53・ST54 例を除く)。

鉄製環状鏡板付轡についても、型式は決まっており、鉸具造立聞環状鏡板付轡か大形矩形環状鏡板付轡に限定される。鉸具造立聞環状鏡付轡が出土しているのは、雁田 B4 号横穴(亘理町)、川袋 1 号墳(利府町)、引込 6 号横穴(岩沼市)、矢本 88 号横穴(東松島市、佐藤ほか 2008、2010)などであり、一方、大型矩形立聞環状鏡板付轡は、大年寺山 4 号横穴(仙台市)、大年寺山 10 号横穴(仙台市)、安久東 5 号古墳(仙台市)、矢本 53 号横穴(東松島市)などから出土している。

このほか、環状鏡板付轡であることはわかるものの、立聞部が破損していて型式が不明なのが、亀井囲 17 号横穴(大崎市)と矢本 16 号横穴(東松島市)である。また、引手や銜が出土していて轡があったことはわかるが、鏡板が失われてしまっているのが、法領塚古墳(仙台市、氏家 1972)である。

この二つの轡は古墳時代を通じて畿内の倭王権が「スタンダード」として製作し続けていた、特別な意味を持った環状鏡板付轡で、宮城県内から出土するこれらの轡が、倭王権から直接、あるいはそれらの影響下で在地で生産が行われていた可能性を示唆することができよう。

別稿(宮代 2022)でまとめる機会があったが、古墳時代の馬具については、馬具の素材や付属具の多寡などで階層性が認められることがわかっており、素材に関しては「鉄製よりも鉄地金銅製が優位」、付属具の多寡に関しては「轡 1 点のみの出土よりも、金属製の杏葉、雲珠・辻金具、飾金具などを数多く持つ方が優位」にあることが明らかになっている。

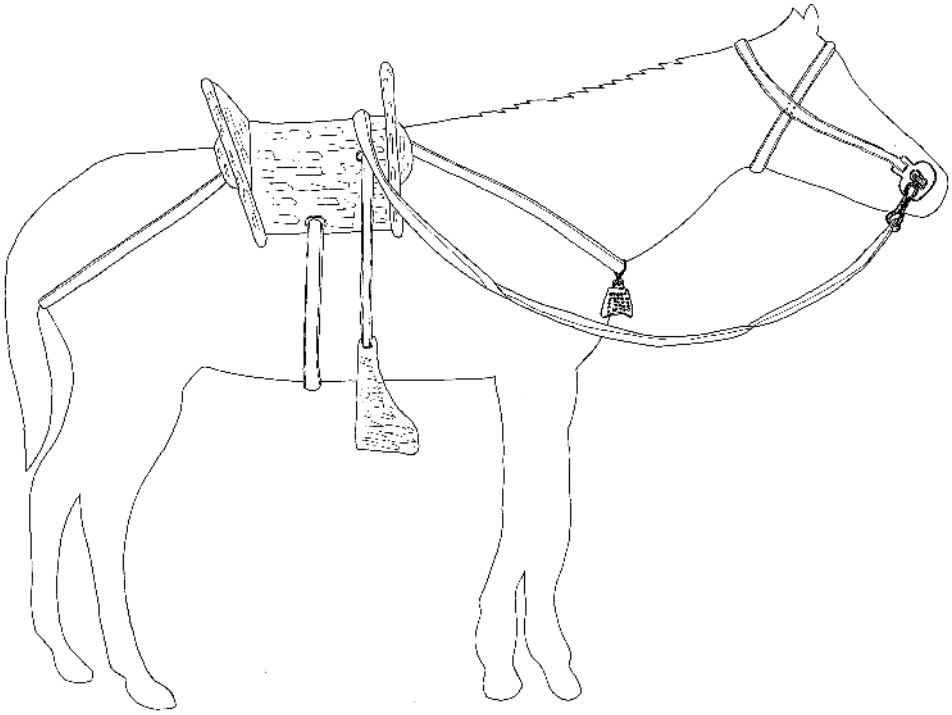
そこで宮城県内の馬具をもう一度総覧すると、鉄地金銅張の轡が出土したのは、今回報告された合戦原 ST36 が県内で初めてであり、同巧の杏葉も、同じく雲珠・辻金具も県内では他に例がない。

また、鉄製ではあるが、障泥金具についても合戦原 ST49 での出土(第 519 図 14〜17)が初めてであり、馬具の保有について、合戦原遺跡群を造営した人々が、県内の他の古墳や横穴の被葬者よりも、極めて優越した立場にあることがわかる。興味深いのは、轡は同じ鉄製であるにもかかわらず、大形矩形立聞環状鏡板付轡を中心とする馬具のアセンブリッジの方が、鉸具造立聞環状鏡板付轡を中心とする馬具のアセンブリッジよりも、馬具の付属品を多く持つ傾向が宮城県内においては認められることだ。

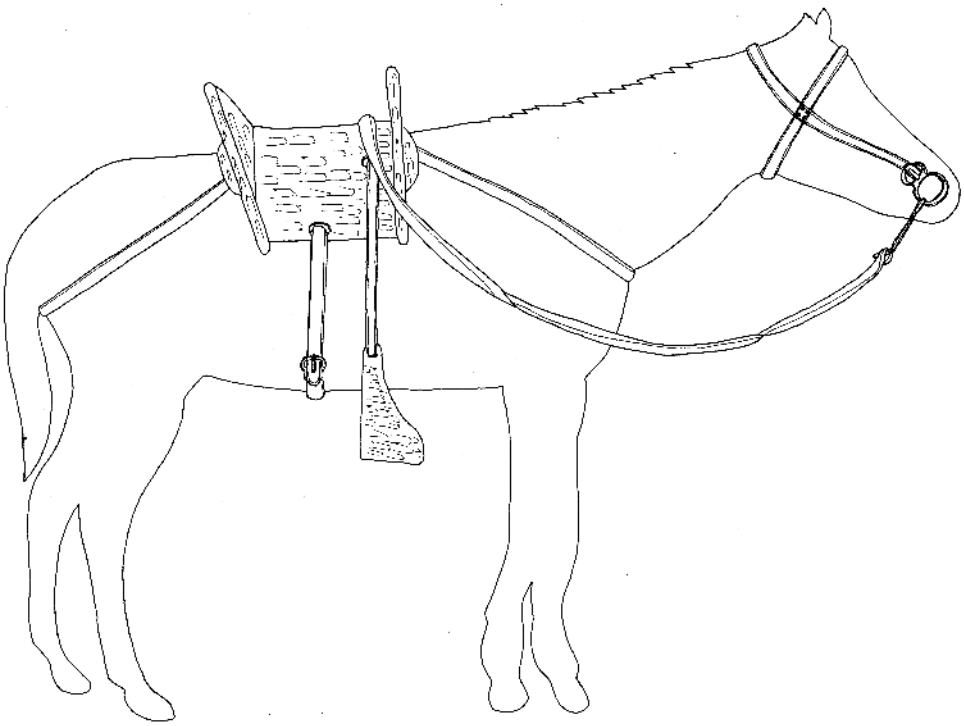
大形矩形立聞環状鏡板付轡が出土した大年寺山 4 号横穴(菱形飾金具 1、半円形飾金具 2)・同 10 号横穴(方形飾金具 2、半円形飾金具 2、木芯鉄板張壺鐙 1 組)、安久東 5 号墳(方形飾金具 3、半円形飾金具 4、鞍座金具 4)と、鉸具造立聞環状鏡板付轡が出土した合戦原 ST49（木芯鉄板張壺鐙 1 組、金属製輪鐙 1 組)、川袋 1 号墳(方形飾金具 1)、引込 6 号横穴(イモガイ装飾金具 2)などを比較すると、壺鐙の価値をどう考えるかにもよるが、前者の方がやや優勢であろう。

東北地方は他の地域と比べて相対的に鉄地金銅装や金銅装の馬具の出土が少ない地域で、その多くは南の福島県に集中している。中でも、合戦原遺跡の馬具の保有のあり方は、鉄製と鉄地金銅張という違いはあるものの、障泥金具を伴う点や、鉄地金銅装の杏葉などの馬具を出土している点などから、福島県いわき市の中田横穴などに近い。いわき市域では、八幡横穴群などからも多数の鉄地金銅装の馬具が出土しているが、東北地方ではむしろ例外的といってもよい。このような馬具の保有のあり方は、そのまま地続きともいえる合戦原遺跡の被葬者たちに取り込まれた、ということができるだろう。

吉ノ内１号墳（角田市）出土馬装復元図

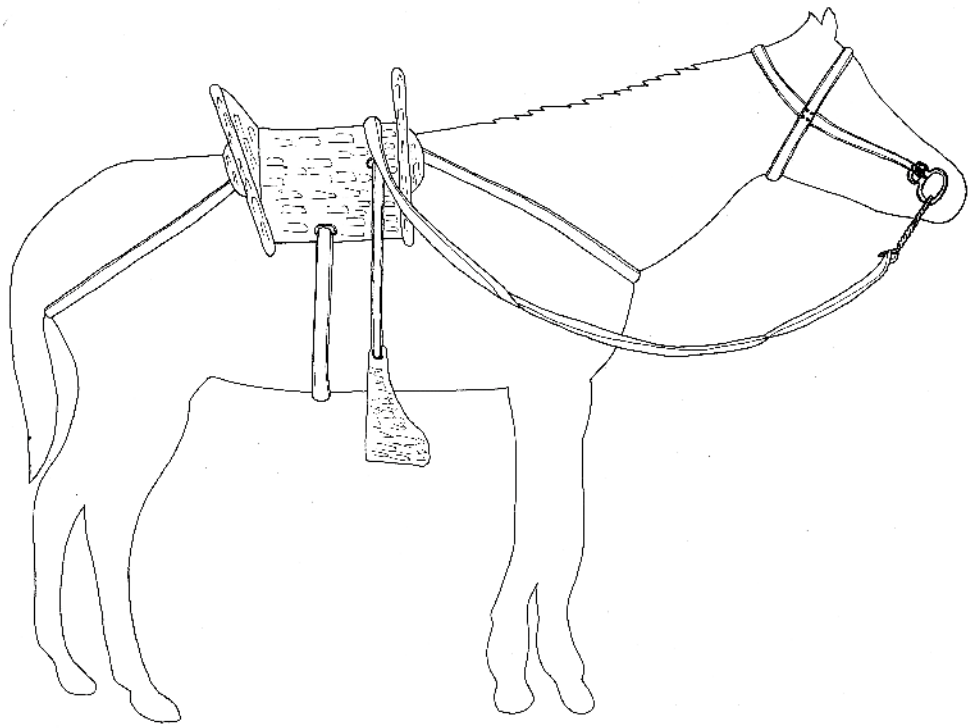


川袋１号墳（利府町）出土馬装復元図

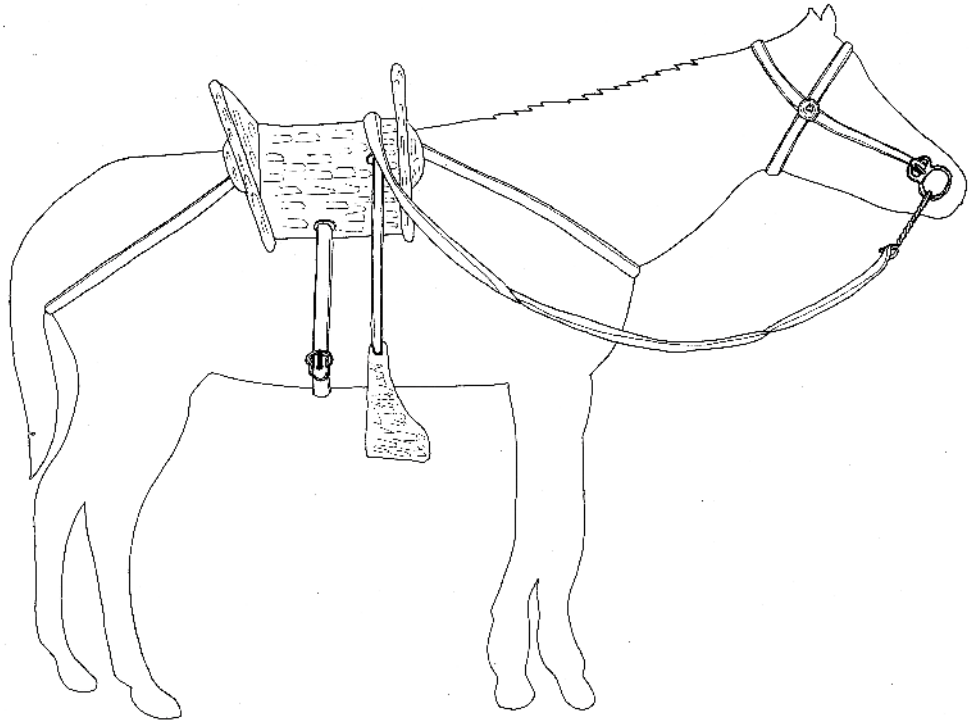


第523図　宮城県内出土馬装復元図１

雁田 B4 号横穴（亘理町）出土馬装復元図

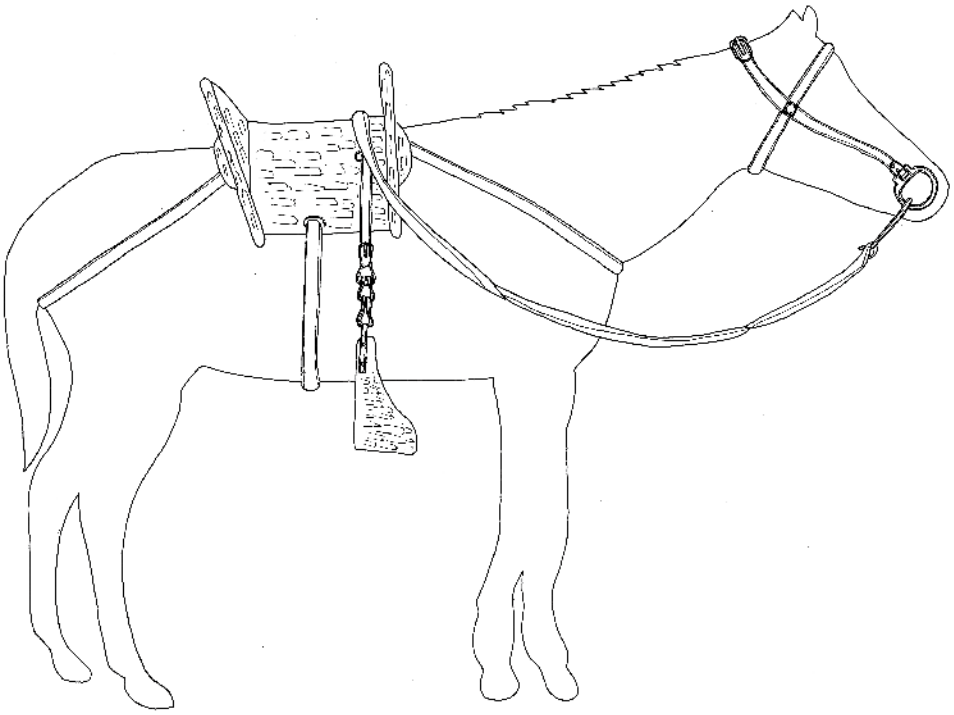


引込 6 号横穴（岩沼市）出土馬装復元図

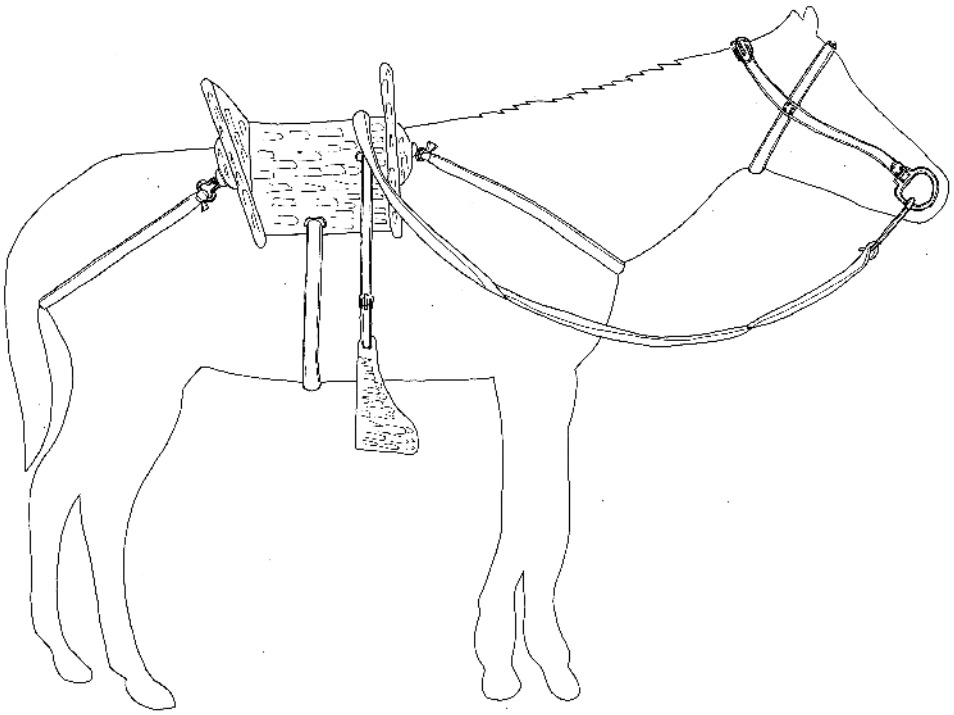


第524図　宮城県内出土馬装復元図２

大年寺山10号横穴（仙台市）出土馬装復元図



安久東５号墳（仙台市）出土馬装復元図



第525図　宮城県内出土馬装復元図３

本節の執筆にあたっては、仙台市教育委員会、大崎市教育委員会、岩沼市教育委員会、東松島市教育委員会、利府町教育委員会、亘理町教育委員会、柴田町教育委員会、山元町教育委員会の関係者の方々にお世話になった。大谷宏治、平林大樹の２氏からは懇切なご教示を賜り、山元町の山田隆博氏からは遺物の見学に際してご高配を賜った。記して感謝申し上げる。

宮城県出土の馬具に関しては、今回、その大半を実見することができたこともあり、未実測だった馬具等の実測図の掲載も含め、現在、別稿を検討している。しばらくお待ちいただきたい。

第５章第２節７　引用・参考文献

氏家和典 1972 『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』仙台市文化財調査報告書第５集　仙台市教育委員会

大谷宏治 2014 「古墳時代後期～終末期の鑣轡の新例」『研究紀要』3　静岡県埋蔵文化財センター

大谷宏治 2015 「古墳時代後期以降の鉸具式・板状掛留式立聞鑣轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念論集』河上邦彦先生古稀記念会

大谷宏治 2016 「中原４号墳出土大刀と馬具からみた被葬者の性格」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告書第 59 集　富士市教育委員会

大谷宏治 2018 「東平 1 号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像」『伝法 東平第１号墳』富士市埋蔵文化財調査報告 第 64 集　富士市教育委員会

岡安光彦 1984 「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

岡安光彦 1985 「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第２号　古墳文化研究会

角田市教育委員会 1992 『西屋敷１号墳・吉ノ内１号墳発掘調査報告書』角田市文化財調査報告書 第８集

片山健太郎 2018「古墳時代の障泥とその系譜」『古文化探叢』第 81 集　九州古文化研究会

佐藤敏幸ほか 2008 『矢本横穴墓群Ⅰ』東松島市文化財調査報告書第５集　東松島市教育委員会

佐藤敏幸ほか 2010 『矢本横穴墓群Ⅱ』東松島市文化財調査報告書第７集　東松島市教育委員会

斎藤　弘 1985 「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』2　古墳文化研究会

志間泰治 1975 『亘理の古墳』　亘理町

仙台市教育委員会 1976 『仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書 第 10 集

新藤秋輝・佐藤則之ほか 1990 『大年寺山横穴群』宮城県文化財調査報告書 第 136 集　宮城県教育委員会

高橋守克 1978 『川袋古墳群』利府町文化財調査報告書第１集　利府町教育委員会

津野　仁 2015 「第一部 第二章　馬具」『日本古代の軍事武装と系譜』吉川弘文館

堀　哲郎 2017 「東北地方における騎馬文化の受容と推移」『第 22 回東北・関東前方後円墳研究会　大会〈シンポジウム　馬具副葬古墳の諸問題〉　発表要旨資料』　東北・関東前方後円墳研究会

宮代栄一 1986 「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　古墳文化研究会

宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第 30 号　埼玉考古学会

宮代栄一 1997 「古墳時代の面繋構造の復元－Ｘ字脚辻金具はどこにつけられたか」『HOMINIDS』創刊号　CRA

宮代栄一 2003 「古墳時代における尻繋構造の復元」『HOMINIDS』第３号　CRA

宮代栄一 2004 「『杏葉』と呼ばれてきた『障泥』－古墳時代の障泥にみられる２つの系譜－」『日本考古学協会第 70 回総会 研究発表要旨』日本考古学協会

宮代栄一 2015 「長野県出土の馬具の研究－北信出土の環状鏡板付轡を中心に」『信濃大室積石塚古墳群の研究 4』明治大学考古学研究室

宮代栄一 2016 「馬具でなくなった馬具－古墳時代後期における馬具の副葬形態をめぐる一考察」『駿台史学』157 号　駿台史学会

宮代栄一 2022 「金鈴塚古墳出土馬具群とそれらが意味するもの」『金鈴塚古墳と古墳時代の終焉』六一書房

渡辺清子 2000 『引込横穴墓群』岩沼市文化財調査報告書第１集　岩沼市教育委員会